

Eureka IX

六年制通信 No.24 令和3年11月12日(金)号

芸術は長く…?

学生時代に朴歯の高下駄を履いていました。白く太い鼻緒で、高さは15 cmくらいあったように思います。生徒諸君は下駄を履いたこと、ないでしょう。私は好きでね、カラコロと音がして校舎内では迷惑だったかもしれませんが、自分ではかっこいいつもりでいたのです。毎日どこへ行くにも愛用していたのですが、ある日大学の立て看板に「下駄履き禁止」と書かれていて笑ったことがあります。私しか履いていなかったのですから、ピンポイントの注意ですわな。あの下駄、今でも売っているのかなあ。

先日、テレビで高校生くらいの女の子が何の脈絡でか「下駄箱の上に…」と言っていて、インタビューもスタジオのタレントさんたちもその発言を普通に受け取っているようでした。私は、ほほおと思いましたよ。今の若い世代でもまだ「下駄箱」と言うのです。中に下駄なんて入っていないでしょうに。てっきり「靴箱」としか言わないのだと思っていました。下駄箱なんて死語だろうと。もちろん、「下駄をはかせる」や「下駄を預ける」なんかは慣用表現ですから使われているのですが。他にも、死語になってもよさそうなのにいまだに使われている言葉がありますね。筆箱に筆を入れている人、いますかね。歯磨き粉、本当に粉をつけて歯を磨いている人いますか。ただ、これは昔実際に売っていました。私は文字通りの歯磨き粉を知っています。他にもあるでしょうね。探してみると面白いですよ、きっと。慣用表現でも、「財布の紐が固い」とか「財布の紐を緩める」などがありますが、実際に紐のついた巾着のような財布は誰も持っていませんね。私も見たことがありません。

言葉は時代とともに意味が変わっていくものですが、悪い方へ変わっていくとなんだか可哀そうになります。私は「精精、精々(せいぜい)」なんか、そう思いますね。これは今では「ま、精々頑張って下さい」のように、「やっても無駄でしょうが」という少し悪意を含意した使われ方をしますが、本当は、読んで字のごとし「精一杯努力をする」といういい意味ですよ。『ぎりぎりでも暮らしていける』『どうにかやっと暮らしていける』というのを「暮らしていくのが精々だ」とも言いますが、こうなると元の意味と離れ過ぎているようです。一方「とても」というのは「とてもできない」「とても一人では食べられない」のように否定文に使われていましたが、今では「とても美しい」のように使いますね。これは何となくいい意味に変化したようです。

英単語にも意味の変化はもちろんあります。有名なのは nice です。この単語は14世紀から16世紀には「愚かな」「気ままな」という意味でした。ちょっと意外でしょ。

「美味しい」「素敵」という意味に使われ始めたのは18世紀になってからです。

単語だけでなく諺とか格言も誤解や誤用がありますが、これは人によって解釈が違う場合があるので問題ですね。今 nice を「愚かな」という意味で使う人は誰もいませんが、例えば「情けは人の為ならず」などは「情けをかけてもその人のためにはならないから放っておきなさい」という、間違った意味で使う人がいるので困ります。こういうのも探してごらん。結構あると思いますよ。

あるいは、翻訳されるときに誤ったニュアンスを含んでしまったものもあります。これが一番厄介だね。最近どこかで「芸術は長く、人生は短い」というのを「人生は短い、芸術作品は永遠に残る」と解釈している人がいました。これは驚きました。この数年でベストワンくらいの驚きでした。こういう解釈は罪深いですね。これは医学の父ヒポクラテスの言葉とされているもので、当然「医術を極めるには人生は短すぎる」というのが原義です。「少年老い易く学成り難し」と同じです。しかし、この最初の「芸術」という訳が誤解を生むのですね。この単語はラテン語で *ars* (アルス)、英語では *art* なのですが、この場合は芸術という意味ではなくて、自然に対する人工の技とか技術の意味です。英語の *artificial* と *natural* の対比を考えるとわかりやすいでしょう。ちなみに *the liberal arts* を大学の「一般教養」や「教養課程」の意味に使いますが、ここに *liberal* つまり「自由な」という形容詞がついているのは、奴隷ではなく自由人にふさわしい学問という意味です。そして、その学問は、もちろん苦勞して身につけた知識や技術ということですが、お金などとは違って、誰にも盗まれることのない財産なのです。毎年この通信は「何のために学ぶか」で始めていますが、誰にも盗まれない、そして他人に分けても減らない、しかし親からは引き継ぐことのできない貴重な財産を手に入れるため、そういう考えも追加した方がいいですね。

今週のおすすめ

・外山滋比古 『裏窓の風景』 (英潮社)

君たちは「編集後記」と聞いて、あああれか、とはならないのでしょうかね。「文藝春秋」のような、いわゆるオピニオン誌と言われるような雑誌は読まないでしょうから。雑誌の最後に編集者がちょっとした苦勞話や裏話、雑誌とは関係のないエッセイのようなもの、ま、何を書いてもいいのですが、その編集者のカラーによって非常に面白い読み物になったりするのは、外山先生は雑誌「英語文学世界」の編集者をしておられたのですが、今回紹介する本はその編集後記を集めたものです。僭越ですが、外山先生は文章がお上手ですし、また書くことがお好きですね。見開きで一本のエッセイ、全部で百本。どれも抑制のきいた味わい深い文章です。図書館に入れておきますね。

ちなみに「文藝春秋」の巻頭随筆は、これはもう有名で本になっているものも多いですね。司馬遼太郎の『この国のかたち』や阿川弘之の『葎の髓から』などは広く読まれています。古くは田中美知太郎の『巻頭随筆』ですかね。私はこの本を学生時代に読みまして、非常に感動した覚えがあります。田中先生は難しいことを易しく書けるのが本当に頭のいい人だと、よく仰っておられました。その通りですね。

BGM は ユーミン の *Hello, my friend* でした…。